

〔研究論文〕

鵜沼海岸でのサーフィンの発祥前史

小林 勝法

〔Article〕

The Early History of Surfing at Kugenuma Beach in Japan

Katsunori KOBAYASHI

Abstract

Surfing using a small wooden board had been played by children at various places in Japan. Modern surfing was brought to various places, such as Shonan and Chiba, by the Occupation Forces soldiers after the Pacific War early in 1960s. Japanese young men and women learned surfing from U.S. soldiers and the Nippon Surfing Association was established in 1965.

In Kugenuma-Kaigan, Fujisawa-city, Kanagawa-prefecture which is a typical surfing spot of Japan, there was a boy who engaged in surfing from before that. He is Mr. Yoshitsugu Naito. He got to know surfing through the National Geographic Magazine in 1947, and he often made wooden surfboards by himself, and tried to ride the wave. He met U.S. soldiers and he could to see real surfboards in 1951. He made hollow boards with wood. When he got to know about the board of urethane foam through U.S. magazines, he collected the same materials and made a board by himself in 1961.

Based on the interview with Mr.Naito, this research added historical verification from the situation of those days, and recorded the situation of his surfing challenge as correctly as possible.

はじめに

サーフィンはポリネシアに広く普及していた波乗りの技術で、ハワイ王国においては重要な伝統文化として継承され、余暇活動としても頻繁に行われていた。しかし、布教にきたキリスト教宣教師たちに、「享乐的だ」としてサーフィンは1820年代に禁止されてしまう。その後、1900年頃に復活したサーフィンは米国カリフォルニアとオーストラリアに伝播し、当所の若者に受け入れられた。サーフボードの素材や形状などの製造技術の発展に伴い波乗り技術も高度化し、競技化されて近代サーフィンとなった¹⁾。日本には太平洋戦争後に米国軍人によってもたらされ、湘南や千葉などの各地で発祥した。日本で最初にどこで始められたかについては諸説ある。例えば、日本で最初のサーフィン入門書である『たのしいサーフィン』(1971年)には「1960年頃、湘南および千葉に在日外国人によって紹介されたものと、1965年北米のポートランドのデパートで、日本の船員が買ってきて、山形県で始めた二つの系統に分かれます」と記されている²⁾。また、映画『ハワイの若大将』(1963年、東宝)で見事なサーフ・ライディングを見せた加山雄三は、1968年に開かれた全日本サーフィン選手権第3回大会プログラムに「小さいときから映画や文献でサーフィンを知り、今から8年ほど前に自作して乗った。日本で自分が最初ではないか。」と寄稿している³⁾。加山の言う通りだとすると

1960年頃にサーフィンをしたことになる。そして、さらに古いものとしては、映画監督の小津安二郎の定宿として知られる老舗旅館「茅ヶ崎館」(神奈川県茅ヶ崎市)には日本最古のサーフボードとして伝わる板が保存されており、傍証とされる写真から1935(昭和10)年頃のものだとされている⁴⁾。この板でサーフィンをしたかどうかは確かめられていないし、その目撃証言もないが、サーフィンした可能性は否定できない。

個人的にサーフィンをしたと言う場合、個人の記憶に基づく証言が中心であり、物的証拠や目撃証言などが乏しい。それゆえにいくつもの発祥説があるのだが、そういう中で日本の代表的なサーフスポットであり、サーフィン発祥の地のひとつと言われている神奈川県藤沢市鵠沼海岸の内藤喜嗣の事例は本人が郷土史研究者であるということもあり、記憶が詳細で、物的証拠や状況証拠など傍証にも富んでいる。本人は地元の地域コミュニティ誌に自身の体験を「鵠沼海岸でのサーフィンはこうして始まった」⁵⁾として綴っているし、サーフィン関係の資料を収集し、鵠沼市民センター鵠沼郷土資料展示室に展示している。そこで、本研究では内藤への聞き取り調査をもとに、当時の時代状況などから歴史的検証を加え、サーフィン発祥直前の様子をできるだけ正確かつ詳細に記録することを目的とする。なお、おもな聞き取り調査は2012年10月2日、19日、23日に藤沢市鵠沼市民センター鵠沼郷土資料室にて行った。

1. 内藤の生い立ちと郷土史研究への貢献

内藤は1935(昭和10)年11月21日に藤沢市鵠沼下岡(当時)で長一と恒子の三男として誕生した。三男四女の真ん中であつた。生家は現在の同市鵠沼海岸一丁目で、少年時代は家から海まで建物が何もなく、水平線が一望できたという。図1では生地を★で示してある。同年同月には鵠沼海岸で横須賀鎮守府所属の海軍陸戦隊が上陸演習を挙げており⁶⁾、軍靴の足音が高まる中で生まれ、幼少時代を戦時下で過ごした。9歳の時の1945年2月には湘南地区にも米軍機が来襲し、空襲が日常化していった。

誕生した1935年ころの鵠沼海岸一帯は砂丘となっており、県有地であつた。海岸は県立湘南海岸公園として整備されつつあり、現在の国道134号線に相当する湘南海岸道路(鎌倉郡片瀬町(当時)から大磯町までの湘南大橋を除く区間)が開通したのが1935年である。

幼稚園から高校まで近くの湘南学園に通つたが、日常は近所の子供たちと魚釣りや虫取り、野球などをして遊び、夏になると波乗りをしていたという。

鵠沼の沿岸部は江戸時代は砂地であり、幕府の鉄砲場であつた。因みに茅ヶ崎市の柳島には船着き場があつて、そこから陸揚げした鉄砲(大砲)を鉄砲場まで運んだ道が今でも鉄砲道と呼ばれている道である。明治時代になるとその砂地が別荘地として開拓された。皇族や家族、政財界の大物のほか、芥川龍之介や岸田劉生など多くの文人も逗留又は生活した。そのような鵠沼の歴史に関心を持ち、時代とともにめまぐるしく変化する海岸の記録を残そうと考えた内藤は、郷土史の研究会有る「鵠沼を語る会」(1975年11月設立)に入会し、『鵠沼海岸開発史の概略』(2001年)⁷⁾や『鵠沼海岸商店街100年の歴史』(2001年)⁸⁾などをまとめるなど多くの業績を残している。そして、2011年度まで同会の会長を務めていた。サーフィン関係の資料を収集し、公民館で展示を開いたこともあつて、ジャーナリストや研究者から取材を受けることも多い。



図1 鶴沼海岸 (1948年)

2. 日本の波乗り：サーフィン前史

現在行われているような近代サーフィンが日本に伝わる前から日本各地で波乗りは行われていた。茨城民俗学会が編んだ『子どもの歳時と遊び』(1970)には「波乗り」の項があり、「遠あさの海岸でないといけない。ちょうどせんたく板くらいの板を腹にあてて両手でつかみ、好みに合った波を待って、波とともに岸边まで帰ってくる。」と説明されている⁹⁾。記録に残っている波乗りとして最も古いのは、山形県鶴岡市湯野浜で江戸時代の1821年に、酒田の俳人が湯野浜でつけた湯治の日記の中に「瀬のし」と呼ばれる一枚板での波乗りが行われた様子を綴った記録が残っているという¹⁰⁾。また、東京都新島では漁船の床板、これを板子と言うが、これを使った「瀬つかし」と呼ぶ波乗り遊びが1960年頃(昭和30年代前半)までされていた¹¹⁾¹²⁾。また、鳥取県浦富海岸でたくさんの少年が板を使った波乗り遊びに興じている映像が残されている。1932(昭和7)年に撮影されたものと言う¹³⁾。

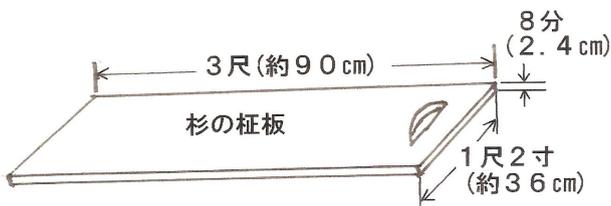
その板子が保存され、神奈川県の大磯郷土資料館に展示されている(図2参照)。大磯は、軍医総監松本順の推奨によって、1885(明治18)年に本格的な海水浴場が開かれた。現在の海の家に相当する「お茶屋」が設けられ、そこでは、地元漁師の子弟などで海水浴客の安全を守った青年が客に泳ぎ方を教えており、板子も貸し出されていた。この波乗りは長く続き、1930(昭和5)年から数年の様子は『大磯の仲間たちーこれが波乗りだー』に詳しい¹⁴⁾。夏の間、別荘の子供たちが集まって波乗りに興じており、波に乗る爽快感や波に飲み込まれ揉まれるスリルを男女問わず楽しんでいたのである。渦巻く大きな波をロールキャベツと呼んだり、「横板で乗る」などの乗り方の思い出が綴られている。



図2 板子

内藤が物心ついた時にも内藤家にも波乗り板が何枚かあったという。父・長一が役員を務める(株)松屋(本店銀座)の若い社員達が夏休みになると海水浴に内藤家を訪れ、波乗りをしていたからであった。海の家でも浮き輪などともに貸し出しされており、青少年が波乗りに興じていた。板は使っていると徐々にすり減って3年くらいで使えなくなるので作り替えることになるが、内藤は小学校高学年になると自作するようになったという。その板は海水につけても湾曲しないように杉の柁板(木目がまっすぐに通った板)で作られ、寸法は図3に示す通りであった。家庭で使う洗濯板より一回り大きい。

板子を使った波乗りは、通常は板の上に腹ばいになって乗るのだが、他の方法もいろいろあった。



通常の寸法は材料購入から一間の板で二枚作った

図3 板子寸法

ながら乗る高度な方法である。さらに、難しいのは「素乗り」と呼ばれる板なしで乗る方法である。これは現在のボディ・サーフィンに相当する。そして、このような様々な乗り方を見物する人たちもいたという。

鵜沼海岸では1909(明治42)年の絵はがき(鵜沼郷土資料室所蔵)に板子を持って波に乗ろうしている少年の姿が映っている。また、当時の流行作家であり、鵜沼に在住していた内藤千代子(1893-1925)は当時の人気月刊誌『女学世界』に掲載した「生い立ちの記」に波乗りについて次のように記している¹⁵⁾。

「何と云っても一番待ちかねて楽しかったのは夏季の海水浴でした。当地の海は遠浅ですけれど割合浪が荒いので『浪乗』には持ってこいなのです、痛快ですよ。板子一枚に身を託して、小山のような大浪と共に、つーと岸邊をさして突進する愉快さ。抜手を切って泳ぐ、浪の底をくぐりつこする、流石女の児で、頭髮のことが少し心配になりましたけれど、そんな事は最初の中、興がのって来れば夢中になつて了ひます。」

この記述から明治時代の後期にも子ども達が男女の区別なく波乗りをしていた事が確認できる。

内藤によると、それらは、「横板」や「板抜き」「板返し」と呼ばれていた。横板とは板を横向きに、つまり体とは十字になるように90度回転させて乗る方法である。そして、板抜きとは板の両脇を持って腕を伸ばして板を体の前方の方へ押し出して乗る方法で、板返しは板をさらに前方へ移動させ、把手となる穴に片手を入れて、片腕で体を支えな

3. サーフィンの出会いと杉板での自作(1947年頃、12歳頃)

内藤がサーフィンを知り、チャレンジし始めたきっかけの一つについて、内藤は次のように記している⁵⁾。

「1947年のクリスマスから、あの綺麗なカラー写真が満載で黄色の表紙で有名な国際地理学会のナショナル・ジオグラフィック・マガジンが米軍の佐官のMr.Davisのプレゼントで我家に毎月届くようになった。この中にハワイでのサーフィンの紹介の写真が鮮明に掲載されていた。背丈の倍ほどのボードを背中に立てかけて5人並んで写真に収まったサーファー達、ビッグ・ウェイブを捕らえ、ボードの上に立って波に乗り滑走する姿など6枚の写真を目にしたとき、驚きと挑戦心が沸き起こった。そして、この時、初めてサーフ・ライディングなる言葉も知った。」

1947年とは内藤が12歳の時のことである。戦後まもなくのことで、普通の少年が目にするのがない米国雑誌を見ることができたという希少な環境が幸運してサーフィンと出会えた。内藤の父の長一はハーバード大学で経営学を、メーシー百貨店(ニューヨーク)で実務を学んでおり、米国にも多くの知人がいた。そのために戦後間もないときでも米国人との交流があったのである。

内藤は古雑誌を処分してしまったとのことなので、この記憶を頼りにして、『ナショナル・ジオグラフィック・マガジン』のバックナンバーを探したところ、1947年頃の記事として2件見つかった。一つは、1935年5月号に掲載された「ワイキキの波とスリル」と題する8枚の写真である¹⁶⁾。1枚は1人のサーファーが自作した背丈の倍もある6枚の板を立てかけた前で撮った写真である(図4参照)。6枚は男女が水着でサーフィンしている写真で、中には二人乗りしているものもある(図5参照)。最後の1枚はアウトリガー・カヌーで波に乗っている写真である。

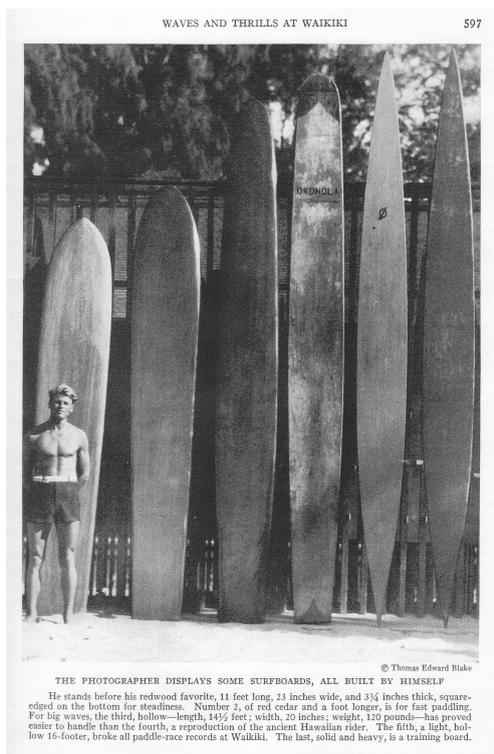


図4 ハワイのサーフボード

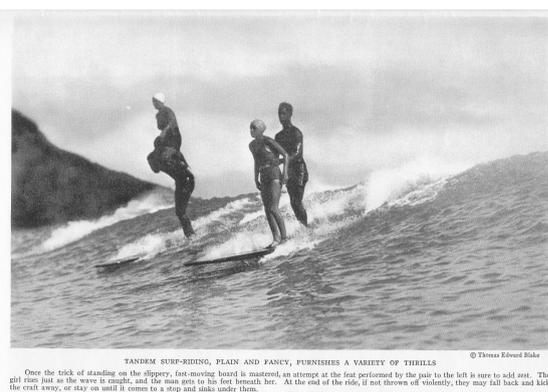


図5 タンデム

Surf-Boarders Capture California

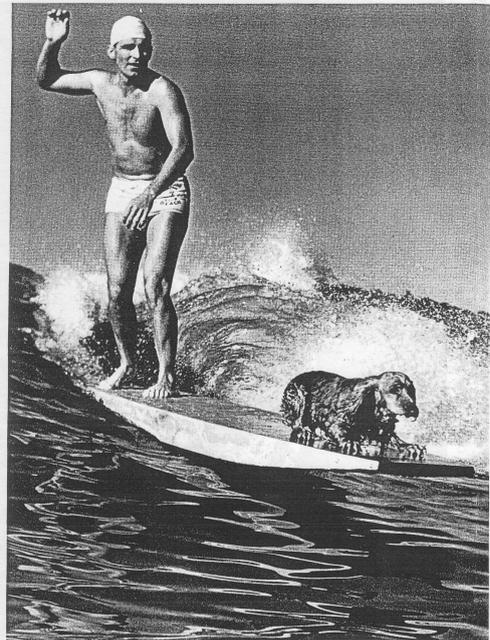


White Water Means Rough Going on Even a Small Wave

As the foam spreads this expert will need all his cunning to avoid a spill. Duke Kahanamoku, famous Hawaiian swimming champion, started the sport in Southern California years ago by taking the ride of his life on the booming winter surf with a board from his native land. Though California rollers do not travel so far as those at Waikiki, they move faster, rise higher, and are much steeper. Surfers now enjoy the pastime along 100 miles of coast from Malibu, Los Angeles suburb to San Onofre, 50 miles above San Diego.

362

The National Geographic Magazine



Tom Blake Rides with His World-champion Dog Surfer, Rusty

Though the spaniel prefers to go out with his master, a famous rider, he is so fond of the sport that he will beg anyone launching a board to take him along. Surfers steer their boards by shifting the balance from side to side. Sometimes they "slide" down a wave, cut over, and skim at an angle to make the ride longer. (See "Waves and Thrills at Waikiki," by Thomas Edward Blake, NATIONAL GEOGRAPHIC MAGAZINE, May, 1935.)

図6 カリフォルニアのサーファー

図7 犬と一緒に

もう一つの記事は、1944年9月号に掲載された「カリフォルニアのサーフボーダー」と題する8枚の写真である¹⁷⁾。華麗にライディングする一人の男性をクローズアップしたものやビッグ・ウェイブに挑戦しているもの、犬とライディングしているものなどである(図6、図7参照)。

1930年から1950年までのバックナンバーを調べたが、この2件の他はなかった。この2件は、内藤が記述している「1947年のクリスマスから」や「5人並んで写真に収まったサーファー達」「6枚の写真」とは食い違っている。そこで、この2件の記事を内藤に見せたところ、「自分が見たものは1944年のこの写真である」と証言した。上記の記述は少年の頃の記憶なので、多少の思い違いはあるだろう。「毎月届く最新版の他に、ライフやグッドハウススキーピングなどのバックナンバーももらったことを覚えている」と述懐した。したがって、内藤が戦後まもなく米国雑誌のバックナンバーでサーフィンに出会ったことは確かであると考えられる。

この一連のサーフィンの写真を見た内藤は、自ら記しているように「驚きと挑戦心が沸き起こった」という。そして、実際にサーフボードづくりに取り組むのである。その様子は『探検隊腰越号⁵⁾』に詳細に記されているが、概略は以下の通りである。工務店で大きな杉板(約45cm×3cm×260cm)を購入し、写真を見ながら先頭部と後部の形を整え、海に浮かべてみるが重くて海面すれすれにしか浮かばなかった。それでも乗る位置を変えたりして1週間ほど挑戦したものの、結局はあきらめて、自作サーフボードの第1号は庭の木陰のバーベキュー場のテーブルとなってしまったと言う。しかし、この後にもう一枚作成しているとのことであった。

4. GIとの出会い(1951年)と合板による自作(1952年、16歳)

写真だけの情報を頼りにした最初の挑戦はあえなく失敗に終わったが、「次のきっかけが1951年の夏に訪れた」と内藤は記している⁵⁾。内藤が15歳の時である。鵜沼海岸でサーフィンをしている進駐軍の米兵を見かけ、声をかけると彼らは日系二世で片言の日本語が話せたという。彼らのボードはくさび形をしていて長さが3m程で、ベニヤで作った張り子のものだった。随分重かったが、浮力もあった。彼らはフナコシとマツイという名で、翌週も米軍座間基地からジープにボードを積んで海岸に現れた。友人の前沢長継と一緒に乗り方を習い、さらにその夏の終わり頃に彼らのボードを1週間借りることができた。午後から吹き出した強風のため、ボードをジープに積んで帰ることが困難になったためにボードを預かったのである。そして、このチャンスを活かし、ボードの寸法を測り、スケッチして、翌年に向けてボードの作成に取り組むことになった。木材

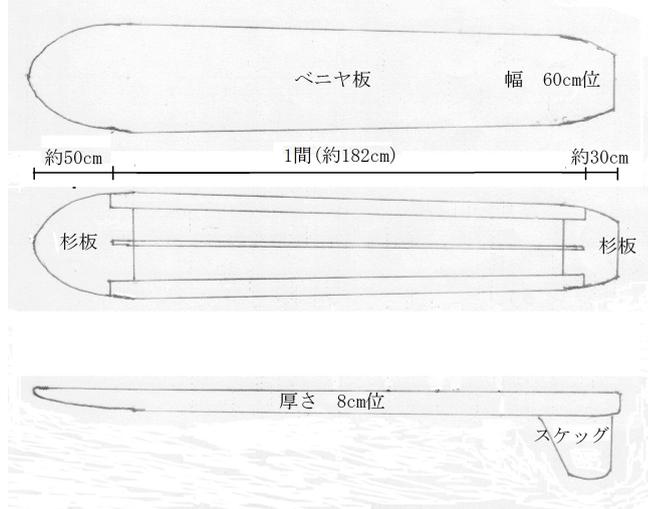


図8 ベニヤ・ボード

が乾燥するまで4ヶ月かけたり、接着剤を工夫したり、防水や水抜き栓を工夫するなどして作成し、翌年の1952年5月から海で波乗りを試し、さらに改良を加え、7月に初めて自前のボードでサーフィンできたという。16歳の夏であった。そのボードの設計図が図8である。これは何回か作成

ドはくさび形をしていて長さが3m程で、ベニヤで作った張り子のものだった。随分重かったが、浮力もあった。彼らはフナコシとマツイという名で、翌週も米軍座間基地からジープにボードを積んで海岸に現れた。友人の前沢長継と一緒に乗り方を習い、さらにその夏の終わり頃に彼らのボードを1週間借りることができた。午後から吹き出した強風のため、ボードをジープに積んで帰ることが困難になったためにボードを預かったのである。そして、このチャンスを活かし、ボードの寸法を測り、スケッチして、翌年に向けてボードの作成に取り組むことになった。木材



昭和22年 湘南海岸公園の中央付近、現アイランドホテル前の海岸入り口から入った際に、アメリカ兵たちはジープやウエボン。キャリアで乗り入れ、ドライバ・インの海水浴場を形成し始めた。 福地誠一氏撮影

図9 GIビーチ

した合板空洞タイプの完成形であり、内藤のスケッチに説明文を筆者が加えた。全長約250cm、幅60cm位、厚さ8cm位の中空構造で、後尾にはスケッグ(フィンのこと)が付けてある。また、前方と後方に水抜き穴を開けてあった。

米兵が鵜沼海岸でサーフィンをしていた場所は当時G I ビーチと呼ばれていた場所である(G Iとは米兵の愛称である)。内藤が作成した1948年頃の地図が図1(鵜沼郷土資料室提供)である。当時の海水浴場は片瀬海岸西浜と鵜沼海岸と2つに離れており、その中間は遊泳禁止区域となっていた。その一箇所に米兵が土日になるとジープなどで乗り込んで、まるで海水浴場のように賑わっていたという。その様子が図9の写真(鵜沼郷土資料室提供)である。戦前戦後の藤沢の様子を丹念に撮り続けていた福地誠一による1947年の写真で、米兵が乗ったジープの横には日本の子どもたちが集まっており、その背景には江ノ島が写っている。鵜沼海岸ではこのように米兵と日本人の子どもが交流していたが、このようなことは全国各地で行われていたことであろう。全国各地で同時期にサーフィンが発生したことは十分考えられる。なお、鵜沼海岸では内藤と前沢の他に米兵にサーフィンを習うような青少年は見当たらなかったとのことである。

5. ウレタンフォームでの自作(1961年、25歳)

合板空洞タイプでライディングできた内藤だが、翌年は受験勉強に時間が取られ、その翌年は大学に入学して馬術部に入ったため、サーフィンをする回数が減り、関心も薄れていた。しかし、サーフィンの世界ではそのころ、革命的な発展期を迎えていた。米国カリフォルニアでFRPコート製のボードが作成されるようになったのである。FRPとはガラス繊維と不飽和ポリエステルから作られる強化プラスチックのことで、これを使ってポリウレタン・フォームから成形したボードをコーティングする工法が開発されたのであった。これによって浮力が著しく増加したので、板の大きさを小さくすることができ、ライディングしながらの方向転換が容易になった。

内藤はこのような米国の情報を米国雑誌から得ており、サーフィンの専門誌が刊行されていることを知るとすぐに購読する。内藤は次のように記している⁵⁾。

「当時、東京駅丸の内南口にあったアーケード内の輸入雑誌専門店でオーダーし、2ヶ月後に手に入れることができた(以降3年ほど購読していた)。」

そして、そのサーフィン雑誌の記事の中にボードの自作方法があるのを見つけた。内藤は次のように記している⁵⁾。

「ボードの宣伝の他に、DIYの為の一式揃ったキットの通販広告が目立った。中でもアメリカのクラークフォーム社は記事として、ボードの作成プロセスと自社のキットでの製作方法を指導していた。」(引用者注：DIY=Do It Yourself)

内藤はこのときには既に就職していたが、サーフィンへの挑戦心が再び点火したのである。早速、サーフボード・キットの輸入を考えましたが、当時は個人輸入が認められなかった。そこで、日本へ手に入る材料を揃えて自作を試みるが、困難が多かった。グラスファイバークロスと不飽和ポリエステル樹脂は義兄が勤める日立化成(株)から、ポリウレタン・フォームは知人を通じて積水化学(株)から調達できたものの、フォームの成型では苦労した。ポリウレタン・フォームの余分な部分を切り落とすために電熱による切断機を自作しなければならなかったし、日立化成(株)の樹脂、薬剤と積水化学(株)のフォームの相性が合わずにはじめから作り直さなければならなかったりした。

苦労の末、ようやく1961年の5月末に完成したものの、内藤は急性盲腸炎に罹ったため、結局、

7月まで待たなければならなかった。しかし、首尾良くライディングに成功し、雑誌で知った新しいテクニックにも挑戦できたと言う。25歳の時であった。

そして、丁度この年の夏に鵜沼海岸で、内藤より数歳年下の佐賀亜光や松田章らが米兵からサーフィンを習い始め、翌1962年に日本初のサーフィングクラブとなるサーフィング・シャークスが誕生する。

6. サーフボード製造の先駆者、高橋太郎、鈴木正との比較

内藤と同じように実際にサーフボードを見たこともないままにボードづくりに夢中になった青年がいた。一人は「日本で初めてサーフボードを作った男」として知られる高橋太郎(1941年生)である。もう一人は、1964年に神奈川県茅ヶ崎市に日本で最初のサーフショップを開いた鈴木正(通称、ゴッドス、1942年生)である。彼らがサーフボードを作った過程と内藤のそれとを比較してみよう。以下の記述は、高橋の評伝¹⁸⁾と鈴木¹⁹⁾の著作¹⁹⁾、筆者が行ったインタビュー²⁰⁾²¹⁾による。

高橋は1941年12月11日に旧東京市赤坂区氷川町で生まれた。高校時代の夏休みは神奈川県葉山の海でキャンプをして過ごし、波乗り(素乗り)もしたと言う。1950年代後半に葉山でも波乗りが子どもの遊びとして行われていたことがわかる。17歳、1959年の夏に小学生向けの雑誌でハワイに関する記事の中に、板の上に立って波乗りしている写真を見て衝撃を受け、サーフボード制作を思い立ったという。そして、実際に制作し始めるのだが、1号機が角材とベニヤ板、2号機はフィンを付け、3号機は横幅を65cmに拡張し、板に反りをつけるなどの改良を加えている。この3号機でテイクオフ(板の上に立って波乗りすること)に成功する。1960年の夏である。この間、国立国会図書館に通い、サーフィンに関する文献を読みあさり、写真などからボード制作へのヒントを得たという。

そして、1961年の夏に葉山の一色海岸でサーフィンをしている外国人に出会い、サーフボードの上に塗るワックスを教えてもらい、ウレタンフォームでできているボードを見せてもらう。彼は在日米軍人の息子であった。当時の日本ではサーフボード用のウレタンは製造されていなかったため、代わりに発泡スチロールを使うことを思いつき、グラスファイバーで表面を固めたボードも作成する。最初は自分たちの遊び道具を自分たちで作ることが目当てだったが、友人や知人の注文を受けるうちに徐々に注文販売の体をなすようになっていき、1963年2月21日に日本初のサーフボード制作会社ダックスを設立した。

鈴木正も少年期に見たハワイの絵はがきに描かれていたサーフィンの写真に惹かれていた。1942年に新潟に生まれた鈴木は土建業を営む父親の転居に伴い、茅ヶ崎に住むことになった。そして、最初のサーフボードはベニヤ板で自作するが成功しなかったという。1962年に鎌倉市七里ヶ浜で米兵に会い、サーフィンを教えてもらうようになる。そして、米兵の帰国に際し、サーフボードを譲り受け、ウレタンフォームと樹脂で自作するようになった。その後、本格的に製造販売に取り組み、1964年に「湘南サーフショップ」(現ゴッドス・インターナショナル(株))を開店する。

三人とも写真だけの情報で、まず木材で作成し、その後、ウレタンフォームの存在を知ってから、国内の材料を工夫して制作するなど共通している。それから、米兵やその家族との接触もあり、彼らから貪欲に情報を得ている。

まとめ

近代スポーツの多くは明治時代に貿易商やお雇い外国人教師によって日本に持ち込まれた。したがって、貿易港であった横浜や神戸、そして、外国人教師がいた旧制高校や大学が日本での発祥地となっている例が多い。しかし、サーフィンの場合は、他の外来スポーツと伝播・普及の仕方が異なる。子どもと駐留軍兵士という庶民の交流によって、1960年頃、日本の各地で同時に発祥している。

このようなことが起きた背景には、日本各地で小さな木板に腹ばいになって波に乗る遊びが以前から行われていたからであった。板の持ち方を変えたり、あるいは、板なしで乗ったりして、様々な方法で遊んでいた彼らの中には板の上に立つことまでは考えが及ばなかったかも知れない。したがって、絵はがきや雑誌などで近代サーフィンの写真を見たときの彼らの衝撃の大きさは容易に想像できる。そして、実際にサーフボード作成に取り組んだ青少年は何人もいたかも知れない。

本研究は、日本での発祥とされる1960年頃よりも遙か前、終戦後まもなくからサーフボード作成に取り組んだ鵜沼海岸の内藤喜嗣の事例について、当時の時代状況などから歴史的検証を加え、サーフィン発祥直前の様子をできるだけ正確かつ詳細に記録することを目的とした。概略は以下の通りである。

少年時代から板子乗りをしていた内藤は1947年(12歳)頃に米国雑誌を見てサーフィンを知り、杉板でサーフボードを作成するが立って乗ること(テイクオフ)はできなかった。そして、1951年(15歳)の夏に米兵と知り合い、ベニヤ板で作った中空ボードを知り、自作を試み、翌年にテイクオフに成功する。大学進学や就職などでサーフィンから離れていたが、米国でFRPコート製のボードが開発されたことを雑誌で知ると、国内の素材で作成し、1961年の夏、25歳の時にテイクオフに成功した。

この内藤の取り組みは、内藤より後の時代になるが、日本のサーフィン界を関連用品の製造販売や競技、競技組織運営などの面でリードした高橋太郎と鈴木正の取り組み方と類似している。すなわち、写真などでサーフィンを知り、木製ボードを試作するがうまくいかず、米兵やその家族との交流やサーフィン雑誌からFRPコート製のボードを知り、国内の素材だけで作成を試み、遂に成功を収めるという過程をたどっている点が類似している。このような取り組みは湘南地区以外にもあったかもしれない。そもそも板子乗りがいつどのように始まったのか、日本のどの地域で行われていたのかなど興味が尽きないが、これらは今後の課題としたい。

付記：本研究は文教大学湘南総合研究所の研究助成を受けて行った「湘南地域におけるサーフィンの発祥」(2011年度)の研究成果の一部である。

文献等

- 1) 岸野雄三ほか編、最新スポーツ大事典、大修館書店、1978年、p.381
- 2) 西野光夫、たのしいサーフィン、成美堂出版、1971年、p.13
- 3) 加山雄三、サーフィンと私、全日本サーフィン選手権第3回大会プログラム、1968年、最終頁
- 4) 茅ヶ崎サーフィン業組合ホームページ <http://www.csu.biz/library/story.html>
- 5) 内藤喜嗣、鵜沼海岸でのサーフィンはこうして始まった、探検隊腰越号、vol.15、2002年3月1日号、pp.19-25

- 6) 藤沢市史編さん委員会編、藤沢市史年表、藤沢市役所、1981年
- 7) 内藤喜嗣編、鵜沼海岸開発史の概略、自家出版、2001年
- 8) 鵜沼海岸商店街有志、鵜沼海岸商店街100年の歴史、(有)八百力商店発行、2001年
- 9) 茨城民俗学会、子どもの歳時と遊び、第一法規、1970年、pp.43-44
- 10) 湯野浜温泉観光協会ホームページ http://www.yunohamaonsen.com/?page_id=34
- 11) ビーパール話題鍋 この“まな板”こそニッポン古来のサーフボードだ！ 新島で復元された伝統的波乗り遊び、ビーパール、1998年7月号、pp.8-9
- 12) 山崎直之、新島の四方山話と子供の遊び、ハイビジネス、1995年、pp.93-97
- 13) DVD『日本サーフィン伝説』、ポニーキャニオン、2010年
- 14) 永峰すみ、大磯の仲間たちーこれが波乗りだー、波乗りクラブ、1998年
- 15) 内藤千代子、歓喜に輝ける夏、生い立ちの記、牧民社、1914年、pp.52-55
- 16) T.E.Blake,Waves and Thrills at Waikiki,The National Geographic Magazine,1935年5月号,597-604
- 17) J.H.Ball,Surf-Boarders Capture California,The National Geographic Magazine,1944年9月号,355-362
- 18) 柴田哲孝、白いサーフボード、たちばな出版、1998年
- 19) 鈴木正、サーフィン、講談社、1981年
- 20) 2011年3月21日に高橋太郎氏の自宅(千葉県いすみ市)で行ったインタビュー。
- 21) 2011年6月28日に茅ヶ崎市のゴッデス本店で行ったインタビュー。